それぞれの花を咲かせるために

熊本産科婦人科学会
会長　近藤　英治

凛とした梅の花が少しずつ咲き始めている。厳しい寒さはなお続いているが、その秘めたる開花は、そう遠くない春の訪れを確かに予感させ、自然と心を躍らせる。

憲政史上初の女性総理に選ばれた高市氏は、幼少期より母から「真っ赤な薔薇のようにあれ」と教えられて育ったそうである。これは、女性としての魅力を大切にしながらも、孤立を恐れず、自らの信念に基づいて行動することを促す教えであったようだ。ナポレオン・ボナパルトがスミレを愛し、復活と希望の象徴としたとされるように、古から人は花に自身の思いや生き方を重ねてきた。さて、皆さんは、今のご自身を花に例えるなら、どのような花を思い浮かべるだろうか。

現在、大学病院および関連病院を取り巻く環境は、決して容易なものではない。人員は未だ十分とは言えないなか、それぞれの現場で、日々の診療、研究、教育に真摯に取り組んでいる。その姿は、厳しい寒さの中でも一輪で咲く梅の花のようであり、感謝の念に耐えない。早く答えにたどり着くことが善とされがちな時代ではあるが、時に、花は咲くまでの過程そのものにこそ意味があるのだと、時代に抗ってみたくもなる。臨床・研究・教育のいずれの分野においても、目に見える短期的な成果が必ずしも真の成長や実力の涵養に繋がるとは限らない。人生は長い。大切なのは、歩みを止めずに続けていくことである。
とはいえ、こうした歩みを、常に一人で続けることには自ずと限界がある。

だからこそ中期的には、同期や近い学年の仲間と互いに支え合い、同じ光の方向を見据えながら切磋琢磨する集団へと育ってほしいと願っている。また、学会などを通じて県外にも多くの仲間を持ち、自らの考えや取り組みが、より広い場の中でどのように位置づけられているのかを知っておくことも、花を咲かせるまでの大切な過程である。向日葵が太陽の方向に一斉に顔を向け、互いに刺激を受けながら大きく伸びていくように、個々の歩みを尊重しつつ力を束ねることで、組織としてのしなやかさと持続的な成長が生まれるはずである。

熊本、そして私たちの教室の発展のため、今後も可能な限り臨床における新たな挑戦や、研究・留学への取り組みを後押ししていきたい。その一方で、私たち一人ひとりが、それを実際に支えているのは、日々現場を支え、懸命に働く同僚であり、家族であることを忘れてはならない。周囲への感謝の気持ちを胸に、それぞれが自分なりの歩みを重ね、この教室で魅力的な花を咲かせることを心から願っている。

2026年　睦月